

『アリアーヌ・ムヌーシュキン：太陽劇団の冒険』観劇レポート

小川竜駆（筑波大学人文・文化学群 3年）

私はこの作品に出会うまで「太陽劇団」についてほとんどなにも知らなかった。そもそも海外の劇団についての知識はなかなか自ら深めようとしてこなかった。やはりどうしても国内の演劇に触れる機会が多くなるし、海外の演劇は言語の壁があったり自分自身との接点がなかったり、様々な意味でどこか「遠い」感覚を持っていたからである。けれども、実はそれは大きな間違いであった。このドキュメンタリーのなかで劇団が辿った道のりや目指してきた表現が一つずつ語られてゆくうちに、気が付けば彼らの強く信じる「演劇像」は私が信じてきた（そしてこれからもずっと追い求めてゆくであろう）「演劇像」そのものであったことに気づかされたのだ。これはかなりの衝撃で、この感動について語るには少々私の演劇との出会いについて語る必要がある。なぜなら私にとってこの感動は極めて個人的な体験と結びついているからである。

十人の演劇ファンがいれば十とおりの「演劇との出会い」がある。そして最初に出会った演劇の記憶からはなかなか離れられないものであろう。私もこれまでかなり多くの演劇に触れてきたが、とくに歌舞伎、文楽、能楽といった日本の伝統芸能とは関わりが深く、文楽の研修生になった時期もあった。（そのため「堤防の上の鼓手」の写真をどこかで見たことだけは覚えていた。）

また、私にとってのさらに原初的な演劇体験は「大衆演劇」といういわゆるドサ廻りの旅芝居であり、その後どんな小劇場の演劇や海外の名作戯曲に触れても、浅草木馬館の大音響の歌謡曲やチャンバラ、隣のおじさんのチータラの匂い、木戸口のおばちゃんの笑顔など忘れられない風景があるのだ。そしてこの両者の演劇体験は私にとって等しく「演劇」の大切な故郷でありユートピアに近いのであるが、ある意味最も相反する表現であるともいえる。古代ギリシャ演劇や能楽といった「祈り」を起点とする伝統芸能が「目の前のお客さん」以外のものに向かって表現を行うのに対して大衆芸能は「目の前のお客さん」に向かって大サービスをするというイメージがある。言い換えると、「死者への演劇」と「生者への演劇」である。映画のなかでのインタビューを聞きながらムヌーシュキンがアジア演劇と出会い感銘を受けたのは、「大衆的」な「民俗芸能」がまだ残る地で「生者」と「死者」両方への寄り添いが実現している点にあったのではないかと考えた。演劇のユートピアが東洋的な共生思想と無縁ではなくて、その意味で私は日本の演劇にあらゆる意味での「優しさ」を感じてきたように思う。そしてこの私の中でこれまでの人生をかけて積み上げられてきた演劇観を「遠い」と決めつけていたフランスの「太陽劇団」と分かち合えた喜び。これがこの得も言われぬ感動の正体であったのではないかと思う。映画の冒頭の「ココナッツを床にたたきつける儀式」や「観客との食事の時間」を大切に感じる感覚。ここにこそ、ムヌーシュキンのいう真に「魅惑的な時間」を作り出し演劇のユートピアを実現するヒントがあるのかもしれない。

講評 奥山 緑（日本大学芸術学部演劇学科教授）

小川さんはとても豊かな演劇体験をされてきていますね！ そうなの、そこなんです。演劇は頭でっかちになれない宿命をもった芸術なんだ、ということを太陽劇団の姿は教えてくれていると私は考えます。数十か国のアーティストやスタッフが出入りし、中にはアフガニスタンの演劇人もいまして、彼らの人権を守るために彼らや彼らの家族のヴィザを気にしてる。「生きることは演劇すること」を体現している創作集団が太陽劇団です。今度は会って、いろいろ芝居の話を楽しみましょう。